

秋の野のをみまへしにならひそよふすもなひくも風のまに／＼

松間紅葉

木枯のふくをまつまの夕紅葉散るぬ先よりをまされにけり

本館の風斗草山居述懐

ぬらちはね訪ふ人かな落葉ふくぬるまをさひしる山下の庵

生ぬさけ柴の庵の青のふらくる人かなし片山の里

かたえきと夢も結はぬ深山路の袖にもすむか有明の月

筋根路やさゆる霜夜に夢さめて有明かたの月を見る哉

世路如夢

夢ぬれやきのふの備も今日の瀬どかはりにかはるけふの世の中

人面も紅葉如錦

袖木にる賤れもかみな秋のみは紅葉の錦きぬ時をなさ

夕かけぬれも出で歸る蛋の舟はやくもさすや夕月の影

氷の面水大和のまを織なすを菊の花でも知れて見つゝも

孝

破

蘆

孝

桃江

錦山

眞榮

孝

蘆

孝

破

孝

蘆

孝

破

孝

蘆

孝

破

孝

辞家見月幾回圓

故郷を立いてしより幾度か月の姿のまどかなる見る
望月の影見る毎に思ふかな故郷出て幾日經にけむ
月影も共に流れて秋の夜のなかつきせぬ水の面かな
不知秋思在誰家

鐵州 芝峯

夜もすがら誰れ秋風を身にまめて衣打つらむ玉川の里
誰家に砧うつらむさらてたにかなしきものを秋の夜な
さなきたに淋えきものを雁の聲さくにえたへぬ獨寐の床
山松の音にかよひて聞ゆなり月にすみゆく笛の二聲
秋の夜の光くまなき月の夜は笛の聲さへすみて聞ゆる

鐵州 桃江 鐵州

雜歌

いたつらにふけぬ身をは秋の夜の月にうつしてかこちぬる哉
紅葉のふもふも

江陽